



http://www.pragmatics.gr.jp

No.46 / Fall 2021

会 長 滝浦 真人

事務局 〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1

愛知教育大学 人文社会科学系 日本語教育講座 北野浩章 研究室内

事務局連絡先 secretary-at-pragmatics.gr.jp

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行口座 記号・番号:00900 - 130378 日本語用論学会

支店番号:099(店名:〇九九) 当座預金 口座番号:0130378 日本語用論学会

《特集 語用論研究の新潮流》

語用論研究の新潮流 (5)

認知語用論と発話の謎解き

後藤リサ (関西外国語大学)

十代の頃はアガサ・クリスティなどの推理小説を好んで読んでおりましたが、探偵と容疑者たちの巧みな言葉の応酬を時にはメモし整理したりしていたにもかかわらず、読者としての謎解きは完敗で犯人は概ね予想外の人物で、落胆したものでした。自分の思考という閉じた世界での推論の流れを可視化しようとする原体験はおそらくこの時であり、私の語用論研究の出発点であったかもしれません。

小説の中に限らず、私たちは日常の会話において、ごく自然に「謎解き」をしているように思えますが、「同じ事象の目撃者が2人いれば、それが自動車事故のように顕著できわめて印象的な事件でも劇的に異なる表示を持ち、その解釈だけでなく、基本的な物的事実に関しても意見が一致しないということがある」(Sperber and Wilson 1995, p.16, 内田他訳)とありますように、解釈を正しく方向付ける確かな証拠だと解釈者が確信する文脈情報は、実は非常に個人的な体験と嗜好に基づいて選別されたものに過ぎません。

字義的発話と非字義的発話の境目に位置するような種々の曖昧性をはらんだ発話の解釈に関心を持っていますが、いわゆるアイロニー発話

のような非字義的な発話の発話者の確信度は、「命題が真であることを伝えようとする意図」からは最も遠く、低いと考えられます。では、その確信度の度合いを解釈者はどのような証拠をもって説明し得るでしょうか。次の電話交換手の発話は発話のアイロニーの一種、echoic allusion (エコー的ほのめかし)といわれるものです (Wilson 2012)。

- (1) チャールズ皇太子: Hello, I'm Prince Charles.
電話交換手: And I'm the Queen of Sheba.

And I'm the Queen of Sheba.は前発話の発話者が「自分は〇〇だから」、と自慢したときの返しとしてのステレオタイプの表現であり、「自分がシバの女王では決してないのと同様に、あなたが〇〇だということもありえない」ということを伝達します。これに類すると思われる実際の発話事例があります。

- (2) One evening, telephoning his intimate friend Bishop André-Marie Deskur, a fellow Pole, at a Zurich clinic, the Pope casually identified himself. He was told by the Swiss operator that “if you're the Pope, I'm the Empress of China.”

(Tad Szulc, “Homecoming For The Pope,” *The New York Times*, 27 May, 1979, p.46, 下線は筆者による)

下線部はローマ教皇がチューリヒの医院にいるデスクル司教に電話をかけたときのスイス人の電話受付係との実際に行われたらしいやりとりです。生活歴や文化的背景におよそ共通項のなさそうな発話参与者たちの発話の伝達内容を解

積するにあたり、推理小説の犯人捜しに匹敵する推論が求められそうです。まず the Empress of China が意味する人物の同定が可能かどうか。候補として、(1) 武則天や西太后など特定の人物、

(2) the Empress という語により与えられる不特定の人物像、(3) the Queen of Sheba に類する表象、etc.が考えつくところですが、インフォーマント(英語母語話者)によると、the Empress といえば映画『北京の55日』(55 Days at Peking, 1963年公開)の西太后のイメージが強く、スイス人の電話交換手もこの映画を観ていたとすれば、(3)の the Queen of Sheba の類似表現として浮かんだのが西太后だったのではないか、ということでした。

さらに本発話が新聞の記事であるということから、発話内容が厳密に再現されているとは限らないという問題もあります。たとえ the Empress of China の意味の同定がなされたとしても、どの程度のサーカズム(嫌味)やインボライトネス(不敬)が含まみとしてあったかがわからず、発話者の意図の全貌は結局捉えきれないこととなります。しかしそのように証拠性の弱い発話であっても、本記事の発話者や発話の背景、特に文化的背景に思いを巡らせ、得られた文脈情報を読み手の推論に投じることは許されるでしょう。

最近、医療・教育の場で収録された会話データの談話分析に謎解き推論の居場所を探っています。医療現場では「共感的コミュニケーション」の研究、例えば「質問」「応答」「共感」のスキルを高めることを目指す戦略的な手法としての発話産出のデザイン研究が主流だと知り、ここに認知語用論の解釈理論を用いた解釈者(聞き手、あるいは読み手)の視点を加え、発話の産出と解釈の双方向から分析できれば面白いと考えました。一例として、患者と看護師の二者会話で、看護師が患者に「ある依頼」を行う際、患者が否定的返答を産出した場合の、看護師による再確認、再依頼の質問発話に着目し、患者の了承を得ることに成功した質問発話の言語的特性を分析しています。具体的には、患者の否定的返答の後、最終的に肯定的な返答を得られるまでに、看護師により産出された確認の質問発話のタイプに共通する特性がみられます。それは、「会話参与者間である情報の共有がなされたということが発話者が確認した」ことを明示的に伝達している点です。この分析視点は、共有されている情報の確信度や証拠性を決定づける発話の言語的要素を、認知語用論の分析手法を用いて明らかにしようとするものです。これが「私にとっての謎解きの新潮流」であると考えています。

参考文献

Sperber, Dan. and Wilson, Deirdre. 1995. *Relevance: Communication and Cognition* (2nd edition). Oxford: Blackwell. (内田聖二他(訳) 2000.『関連性理論—伝達と認知』(第2版) 東京: 研究社出版)

Wilson, Deirdre. 2012. Metarepresentation in linguistic communication. In Wilson, Deirdre; Sperber, Dan. *Meaning and Relevance*. CUP, 230-258.

* * PSJ24 (第24回大会) ご案内 * *

2021年度の第24回大会は、コロナ禍を考慮して昨年に引き続きオンライン開催となります。多くの会員の皆様からの研究発表のご応募をいただき、口頭発表26件、ポスター発表3件、ワークショップ1件の合計30件が採択となりました。プログラムは確定次第、会員メーリングリスト、学会公式ホームページにてお知らせして参りますので、ご確認ください。

◆日程：2021年12月18日(土)、19日(日)

◆会場：オンライン (Zoom)

◆参加費(事前登録)：一般会員1,000円 学生会員無料 非会員は一般・学生とも1,000円
※大会参加手続きをした方に Zoom ミーティング情報をお知らせいたします。

※参加費の入金方法・参加資格の付与方法については現在、準備中です。大会1ヶ月前の11月中旬を目途に皆様にご案内する予定です。

※参加費の当日申込はできません。

◆大会テーマ

「語用論の地平を拓く：

グライス哲学と方言学の最前線から」

◆主なプログラム

≪12月18日(土)≫

10:00~11:40：ワークショップ

10:00~11:55：口頭発表①

12:00~13:00：語用論茶寮

13:00~15:35：口頭発表②

15:40~16:40：特別講演

17:00~18:30：懇親会(詳細は後日発表)

【特別講演】

「推意・意味・意図：

グライス哲学における推意」

大阪大学大学院講師 三木那由他先生

◀12月19日(日)▶

10:00~11:55: 口頭発表③

12:00~13:00: ポスター発表

13:30~13:50: 会員総会

13:50~16:30: シンポジウム

16:30~16:40: 閉会式

【シンポジウム】

1. テーマ 語用論的方言学への招待
2. 趣旨 日本語は語用論的に見た場合、決して一枚岩ではなく、多様性に満ちている。そうした多様性のひとつが地理的変異である。近年、日本語方言は構造的な面だけでなく、その運用面においても地域差の存在が明らかにされつつある。語用論的な視点に立つとき、日本語にはどのような地域差が浮かび上がるのだろうか。ここではそうした興味に根差す研究を「語用論的方言学」と名付け、その世界を紹介していく。「方言学」と「語用論」とは、これまでかならずしも交流が活発でなかったが、このシンポジウムを機に、両者の交流から新たな研究が生み出されることを目指す。

3. 司会・登壇者

司会: 小林隆 (東北大学)

発表者: 小林隆 (東北大学)

中西太郎 (跡見学園女子大学)

津田智史 (宮城教育大学)

椎名渉子 (名古屋市立大学)

ディスカッサント: 滝浦真人 (放送大学)

4. 発表内容 (話題)

発表1	語用論的方言学の構想	小林隆
発表2	言語行動の方言学	中西太郎
発表3	ポライトネスの方言学	津田智史
発表4	語用論的方言学の資料	椎名渉子
コメント	一般語用論の視点から	滝浦真人

【口頭発表の実施方法】

リアルタイム方式 (発表・質疑ともライブ)

発表者は口頭発表 (25分) と質疑応答 (10分) を、大会当日に Zoom にて行います。画面共有で資料が提示されます。

【ワークショップの実施方法】

リアルタイム方式 (発表・質疑ともライブ)

発表者は口頭発表と質疑応答 (合計1時間45分) を、大会当日に Zoom にて行います。画面共有で資料が提示されます。

【ポスター発表の実施方法】

リアルタイム方式 (発表・質疑ともライブ)

発表者は学会が指定するテンプレート (Power Point ファイル) を使って資料を用意し、画面共有しながら「説明」と「質疑応答」を行います (【説明15分+質疑応答15分】×2回を予定)。

【発表賞について】

例年の通常開催と同様、口頭発表、ポスター発表において事前に発表賞の審査を受けることを申告している発表者が対象となります。

◆No Show に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず大会総務委員会に断りなく、大会当日に Zoom 会場に入室せず、発表及び質疑応答を行わない発表者は、「No Show」とみなし、学会ホームページにて公表します。ただし、事前、または、当日に (やむをえない場合には事後に)、発表を行えない (行えなかった) 合理的な事情の説明がある場合には、「キャンセルされた発表」とします。

** 研究会コーナー **

◆関東地区研究会

昨年度は、椎名美智先生 (法政大学) にメイン講師をお願いし、滝浦真人先生 (放送大学) と津田正さん (研究社編集部) も交えた講演会を企画しましたが、今年度はまだ企画が決まっておりません。もし開催できることになりましたら、MLにて会員の皆さまにお知らせ致します。

(関東支部世話役・尾谷昌則)

◆メタファー研究会

メタファー研究会は2021年3月16・17日に「世界のメタファーズ ―普遍性と言語相対性― というテーマで Web 開催されました。11言語のメタファーを対象とし、13名がご発表いただきました。

2021年3月16日 (火)

導入・「英語・日本語のメタファー」

鍋島弘治朗 (関西大学)

「中国語のメタファー」

Ning Yu (ペンシルバニア州立大学)

Lihong Huang (ジョージタウン大学)

劉俊蘭 (関西大学[院])

「ヨーロッパ諸語 懸垂メタファー」

平塚徹 (京都産業大学)

ディスカッション

司会: 杉本巧 (広島国際大学)

「韓国語のメタファー」

吉本一（東海大学）

「フィジー語のメタファー」

浅井優一・篠原和子（東京農工大学）

「アメリ語のメタファー」

野瀬昌彦（滋賀大学）

「フランス語のメタファー」

治山純子（東京大学非常勤）

「セルビア語のメタファー」

岡野要（神戸市外国語大学）

「ラトビア語のメタファー」

堀口大樹（京都大学）

「ポーランド語のメタファー」

ジェブカ・ラファウ（北海道大学）

バビエノ・マテウシュ（北海道大学[院]）

全体総括 司会：楠見孝（京都大学）

なお、次回研究会はHLC（「言語と人間」研究会）との共催で、以下のオンライン・シンポジウムを開催いたします。

テーマ：マルチモダリティーと言語

日時：2021年12月27日（月）・28日（火）

（鍋島弘治朗）

＊ ＊ 委員会・事務局より ＊ ＊

★『語用論研究』編集委員会より

先般、9月7日に今年度第3回編集委員会をオンラインで開催し、『語用論研究(S/P)23号』への投稿論文の査読結果報告、並びにそれに伴い、掲載決定可否の審議を慎重に行いました。投稿された方々には、この場を借りて、お礼を申し上げます。投稿数は、昨年より若干減り、14本（うち、研究ノート1本）となっています。そのうち、何本が最終的に掲載になるかはまだ未定ですが、現在、再審査にかかった論文を選定し、修正をお願いしているところです。意欲的な論文が集まると思いますので、今号の刊行（来年3月末）をお待ちください。皆さんは、「査読」という言葉はすでにおなじみのことと思います。英語でpeer reviewと言います。google検索で「査読」と入れると、様々なサイトや文献がヒットします。今回、この原稿を書くに当たって検索してみると、理科系、文科系を問わず、どの学会も、査読に苦勞されているなというのが垣間見えるサイトもあり、編集者としては興味深かったのですが、どんな基準で査読がなされているか、試しにある論文から引用してみます。日本社会薬学会という理科系の学会です。

Table 1. 査読のポイント

- ① 論文の内容が学会の領域に合致しているか？
- ② タイトルおよび本文がストーリーとして成立しているか？
- ③ 要旨は本文の内容を反映しているか？
- ④ 諸言に研究の背景と目的が明記されているか？
- ⑤ 適切に文献が引用されているか？
- ⑥ 方法は目的に対して適切か？
- ⑦ 方法に記載された内容が、すべて結果に記載されているか？
結果に記載されている内容が、すべて方法に記載されているか？
- ⑧ 考察が飛躍しすぎていないか

[波多江崇\(2014:98\)「特別寄稿 査読のお作法 - 論文査読のポイント」『社会薬学\(Jpn.J.Soc.Pharm.\)』Vol.33 No.2, 98-100.](#)

理科系の学会ですので、われわれ文科系、それも、まだまだ文系色の強い言語系の学会とは若干異なるとは思いますが、全体の方針はそれほど変わりません。例えば、②の「タイトルおよび本文がストーリーとして成立しているか？」は、論文の論旨が通っているか、論証がきちんとなされているか、という論文を書く際の基本的なポイントですし、⑤の「適切に文献が引用されているか？」は、これまでの議論をしっかり踏まえているかということになります。

では、査読に通るためにはどうすればいいでしょうか。「論文の書き方」に類する本はたくさん出ています。でもその前に、教員の方ならどなたも覚えがあるでしょうが、テスト前になると、「先生、どこが出ますか？」と聞いてくる学生は必ずいるものです。私はよく「教科書を読めば読むほど、どこが一番重要か分かるよ。そこが一番出るところですよ」と答えていました。「教師も同じことをして授業やテストを作っているのですよ」と付け加えていました。論文も同じようなものです。問題に取り組みば取り組むほど、肝心なところが見えてきます。そこが一番査読する側も評価するところだと思います。実は、査読者は、論文の書き手である投稿者以上に、その論文について調べなければなりません。もちろん、その分野について専門知識を持っているから選ばれるわけですが、投稿者が引用している文献は当然のこととして、それ以上の知識と洞察力が求められます。通常、どの学会誌でも、査読に数週間から数ヶ月かけているのはそのためです。

そのためには、問題を取り込み、考察し、書く（あるいは発表する）、さらに人に見てもらい（議論する）、そうすれば必ず良い点・悪い点が

見える、それを何度も繰り返す、という作業が必要です。入力>考察や内省>出力>結果の外部評価>次の入力>...>さらなる入力>...と繰り返せばいいのです(入力から出力のくだりは、養老孟司さんの講演をヒントにしました。ご興味ある方は以下をご覧ください。)

<https://www.youtube.com/watch?v=yaotedIm3M8&t=2185s>

ですから、ここからが実は本題なのですが、本学会に関係する指導教員の方々へお願いがあります。ご自分の指導の院生、ポスドクの方の投稿論文を、彼ら、彼女らが投稿する前に一緒に考えてあげてください。一緒に議論するだけで結構かと思えます。過干渉は避けなければなりません。査読をしていると、これは独りよがり、誰にも見てもらってないなという原稿はすぐに分かります(実は外部査読の先生から編集委員会に苦言が来る論文もいくつかあります)。また、投稿者ご自身もどしどし指導教員の先生とご相談ください。いらっしゃらなければ、同僚や先輩後輩の間でも議論を深めてみてください。今はZoomやLINEを使えば、遠くからでも簡単に会話ができます。

さらに、最低でも、形式を整えることから始めるようにされたらと思います(ここでの形式は論証の仕方という形式も含まれます)。人間というものはおかしなもので、形式を身につけ型にはめ込むと途端に安心感が出るのでしょうか、その後の伸びが違ってきます。私はテニスを楽しみます。もういい年なので、なかなか上達しませんが、スクールでは必ず形式練習というものをやります。ゲーム形式で、あっちに打ったらこちらが空くので、空いたこちらへ打つ練習から始めて、そのあとはどこへ打ってもいいから、相手との勝負、と言うやり方です。そうすると、俯瞰的にゲーム全体を見る見方が身につきます。そうすると今度は反対に、個別に自分の技量のどこがだめなのかが分かってきます。スポーツも学問も、(配分は違いますが)肉体と頭を使う作業と考えたら、どこか共通点があるのではないのでしょうか。

さて、編集委員会から、皆さんに必ずお伝えしなければならぬことを忘れるところでした。研究倫理に関することです。すでにNewsletterでお願いしたとおり、「剽窃、二重投稿、不適切な自己引用、サラム論文などは禁止しますので、ご注意ください。」としております。現在、このことを明文化するように、投稿規定・スタイルシートの改訂を急いでおります。来年度の投稿から間に合うように、文言を付け加えています。特に、大会発表をまとめた『大会発表論文集

(Proceedings)』に書かれた場合、十分な加筆・修正をお願いします。全く同じものは二重投稿になりますので、ご注意ください。また、一般に定説となっているような事柄でも、必ず引用を付けるという癖を日頃からつけてください。これらも剽窃と見なされるようになっていきます。文科省の方でも、独自に調査し、人文系でもこの剽窃に対する意識が低いと見なされているようです。大学にお勤めなら、こうしたことを避けるために、研究倫理研修を受けるのですが、大学院生の方、ポスドクの方、またフリーでお仕事をなさっている方などはなかなか機会がないように思います。日本学術振興会の研究倫理 e ラーニングコース(e-Learning Course on Research Ethics)[eL CoRE] (<https://elcore.jsps.go.jp/top.aspx>)などを受けられることをお勧めします。さらに、編集委員会では、Editor's kick と言いまして、不首尾な投稿論文は、査読にかける前にお返しすべきだということも議論されました。

以上、余計なことも申し上げました。まだまだ、コロナ禍が続きますが、くれぐれもお気を付けてお過ごしください。

(編集委員長・田中廣明)

★大会総務委員会プロシーディングス担当より

日本語用論学会では、2005年度第8回大会より『大会発表論文集』(Proceedings)を発行しておりますが、2020年度第23回大会の論文集(第16号)は、本年6月に学会のホームページで公開されました。

以下、掲載された論文数をご報告いたします。

研究発表(日本語) 16本

研究発表(英語) 1本

ワークショップ発表(日本語) 15本

ワークショップ発表(英語) 該当なし

ポスター発表(日本語) 6本

ポスター発表(英語) 1本

合計で39本が掲載されました。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございました。

(竹田らら)

《事務局より》

★会費納入のお願い

年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 7,000 円です。よろしくお願ひ申し上げます。学会口座は以下のとおりです。

【郵便振替】

口座番号：00900-3-130378

口座名：日本語用論学会

【ゆうちょ銀行】

支店名：099

口座種類：当座

口座番号：130378

口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会費専用ページ」より、クレジットカード決済も可能です。会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく、下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室

E-mail: psj-at-outreach.jp

★令和 3 年の激甚災害ならびに新型コロナウイルスによる影響を受けられた皆様へ

日本語用論学会では、激甚災害に指定された豪雨の被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2021 年度会費」ならびに「2021 年度年次大会の参加費」を免除いたします。被災された皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

また、「新型コロナウイルス感染症」の直接・間接的影響による著しい経済的な影響を被っている会員の皆様におかれましては、以下の連絡先にまずはご相談ください。

日本語用論学会事務局

〒448-8542

愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1

愛知教育大学 北野浩章研究室内

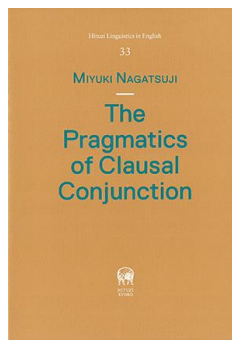
E-mail: secretary-at-pragmatics.gr.jp

(事務局長・北野浩章)

★《新刊・近刊案内》★

■『[The Pragmatics of Clausal Conjunction](#)』長辻幸 (著) ひつじ書房 (定価 9,800 円+税)

本書は、日英語を対象に、節を等位接続した構造 (節等位接続構造) の解釈メカニズムについて、2つの異なる推論パターンに基づいてモデル化される通言語的特性を明らかにしている。



節を連結する英語の and 連言文に対応する日本語には、「～テ、～する」「～タリ、～タリする」「～シ、～する」といったような複数の構造が対応し、文脈に応じて細かな使い分けがなされる。本書は、①日本語の連言接尾辞テ、タリ、シにコード化される意味を規定することによって各構造の推論特性を抽出し、②日本語の節等位接続体系は、関係的推論と独立的推論という推論パターンの区別によって、テ形構造とタリ・シ構造に 2 大別され、さらに後者は、例示機能の目的によってタリ構造とシ構造が区別されること、③関係的推論と独立的推論という推論パターンの区別は日英語に共通し、節等位接続体系の通言語的な基本的二分的モデルを表すこと、を明らかにしている。本書は、科研費研究成果公開促進費の助成による博士論文の出版で、アメリカ語用論学会で発表され聴衆に高く評価された内容を含む。節等位接続体系の研究に認知語用論から光を当てる好著である。(2021.2.22 刊)

■『[認知言語学の最前線 山梨正明教授古希記念論文集](#)』児玉一宏・小山哲春 (編) ひつじ書房 (定価 9,800 円+税)



標題の通り山梨正明氏の古希を記念して編まれた論集で、山梨氏と共に認知言語学研究の第一線に立ち続けてきた研究者たちによる 18 本の最新の論考を集めている。山梨氏の経歴や業績の紹介は最小限に留めるなど祝祭的趣きは敢えて控えられており、あくまで一冊の学術書として世に問おうという姿勢が見て取れる。実際、冒頭を飾る Ronald Langacker 氏による 50 ページ超の重量級論文を皮切りに、豪華執筆陣がそれぞれの研究活動の「最前線」を縦横無尽に表現する様は、正に圧巻である。なお、認知言語学の論集として編まれてはいるが、本学会創設メンバーとして我が国における語用論の発展に尽力してきた山梨氏の節目を記念するにふさわしく、発話行為 (高橋論文)、好まれる談話展開 (八木橋論文)、もじり (榎山論文)、連句 (大森論文)、感情表出 (谷口論文)、

感情とパーソナリティ（篠原論文）、非従属化構文（堀江・江論文）など、語用論の領域と重なるトピックが数多く取り上げられており、認知言語学と語用論が深く関わりあい、学問的刺激を与えあう分野であることを改めて感じさせてくれる。（2021.5.31 刊）

■『言語学と科学革命 認知言語学への展開』山梨正明（著）ひつじ書房（定価 3,200 円＋税）



言語研究に限ったことではないが、新しい理論は、それ以前の理論を乗り越える形で生み出されるものである。著者は「自らコミットしている研究パラダイムの歴史的背景と学問的背景を理解しておくことは、今後の研究にとって重要な意味をもつ」と述べて、つづつ、「若い研究者の大半は（中略）研究パラダイムの歴史的な背景には興味を示さないまま（あるいは、この背景を知らぬまま）研究を進めている」とも指摘している。本書は、構造言語学から生成文法、認知言語学へと展開して来たパラダイムの変遷を、その背景にある科学観と言語観とともに明快に論じている。本書を読み進めると随所で感じられる当時の空気感は、このパラダイム変遷のうねりの中で研究を積み重ねてきた著者だからこそ描き出すことができたのだと思う。認知言語学・語用論に関心を持つ大学生・大学院生はもちろん、熟手の研究者もぜひ手に取ってじっくり味わってほしい 1 冊である。（2021.5.31 刊）

■『英語の思考法 一話するための文法・文化レッスン』井上逸兵（著）筑摩書房（定価 860 円＋税）



本書は、いくら英語を学んでも自然な会話がなかなかできない理由を、英語コミュニケーションにおける思考法の観点から概説するものである。簡潔で分かりやすい文章が、英語学習者、英語教師、言語研究者など様々な読者を魅了する一冊である。特に 4 章「応用編」、5 章「実践編」は 1～3 章で学んだ内容を具体的に活用したい気持ちを高めてく

る。英米の価値観や言語表現との結びつきが具体例とともに丁寧に解説されており、興味深く、一気に読み進めることができる。そして、これらはポライトネス研究や認知言語学などの知見に裏付けされたものであり、学術的な書としても受け取ることができる。「なぜこんなに英語を勉強しているのにうまくしゃべれないのか？」という多くの英語学習者が抱える問題に学術的知見をもってアプローチすることで、言語研究の成果が実社会の中で生きる様をあぶりだした本書は、研究者を元気にする一冊でもある。（2021.7.8 刊）

■『動的語用論の構築へ向けて 第3巻』田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）開拓社（定価 4,400 円＋税）

■『動的語用論の構築へ向けて 第3巻』田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）開拓社（定価 4,400 円＋税）



本書は『動的語用論』シリーズの第 3 巻である。「ことばの動的性質」について超領域的に模索し、ことばが動き、獲得され、通時的に変化し、マイクロ、マクロに渡って変異するその有様の解明こそが動的語用論研究であると述べている。第 3 巻は 4 部から成る。

第 I 部は「相互行為言語学・類型論」であり、4 本の論文（堀江薫・黄祺佳、木本幸憲、遠藤智子、池沙弥）が収められている。第 II 部は「認知言語学」（2 論文：山田仁子、小松原哲太）、第 III 部は「会話分析・談話分析」として、3 本の論文（伝康晴、名塩征史、早野薫）で動的なことばを詳細に分析している。最後の第 IV 部は「動的語用論の広がり—歴史語用論・ポライトネス、会話と文法、民族詩学—」となっており、各分野の第一人者 4 名（3 論文：椎名美智・滝浦真人、北野浩章、片岡邦好）からの最新の研究成果が掲載されている。「動的語用論」がどのような広がりを見せるのか、読者が本書から汲み取り、さて、他には何が「動的」であるか？と考えるのも楽しいかもしれない。（2021.7.15 刊）

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社に

よるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■思いの外（冷静に考えればある意味予想通りに）コロナ禍が長引き、もはや私たちはウィズコロナという新しい世界で生きていく覚悟を決めなければならないかも知れません。研究、教育、そして校務の中で、この状況だからこそそのメリットのカケラを見つけながら、前向きに日々を過ごしていこうと心がける日々です。（秦かおり）

■ここ数か月のコロナ禍の生活は変化してきたように思います。感染拡大が始まったところに、今後は感染が落ち着いたとしても完全に元通りになるのではなく新しい生活になるとよく耳にしていたのですが、その「新しい生活」に近づいたような気がしてきます。（野村佑子）

~~~~~

日本語用論学会 Newsletter 第 46 号

発行：日本語用論学会広報委員会

発行日：2021 年 11 月 1 日

[広報委員会]

\* 委員長：秦かおり

\* Newsletter 編集担当：野村佑子

\* 公式ホームページ担当：横森大輔

\* 会員メーリングリスト担当：八木橋宏勇

E-mail: [webmaster-at-pragmatics.gr.jp](mailto:webmaster-at-pragmatics.gr.jp)